

---

# 南北の海峡 -The Split Fate-

伊東 椋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

南北の海峡 - The Split Fate -

### 【Nコード】

N6322Z

### 【作者名】

伊東 椋

### 【あらすじ】

41度線 本州と北海道を隔てる津軽海峡に定められた、南日本と北日本を隔てる軍事境界線。南北を隔てる海峡の代名詞。大戦後、南北に分断された日本は半世紀の間、二つの国家として対立していた。北日本軍の八雲浩上尉は負の過去を抱えながら、ある任務へと向かう。その先に、彼の過去に深く関わる運命が待っていると知らず

## 01 MDL (前書き)

MDL Military demarcation line  
e .

: 軍事境界線。

(注) この物語は、実在する国家、団体、事件等とは一切関係ありません。又、個人の主義、主張を表すものでもありません。

## 41度線

それは、南北に分断した日本の中に定められた軍事境界線である。北海道と本州を隔てる津軽海峡の中心線に設定され、北海道戦争（北側の名称：祖国解放戦争）の休戦協定の際に、北海道を領土とする北日本と本州以南を領土とする南日本の軍事境界線として宣言された。

北緯41度線付近にあることから、41度線と呼ばれることが多く、又は北方軍事境界線と呼称されることもある。

元々は大戦末期、米国と講和を成した日本に対し、ソ連が不可侵条約を破棄して侵攻し、北海道の半分を占領したのが始まりだった。ソ連は北海道の半分を占領下に置いたまま、留萌〜釧路までのラインを設定し、日本人民共和国を建国させた。このソ連の思惑により、日本は南北に分断された。

この日本の分断により北海道戦争へと至るが、結果的に北海道全土が北日本の支配下に落ち着き、日本は津軽海峡を境に分断国家へと至った。

境界線付近約三海里は非武装中立海域とされており、休戦協定の内の規定によって双方の警備部隊が境界線付近の監視と警備を実施している。

海峡は一見穏やかに見える時もあるが、どこか常に怪しい波のうねりがあった。

海面を撫でるように、一陣の風が吹く。

北方の風が吹く、冷たい津軽海峡。

北海道と本州を隔てる海峡　それは、政治的にも深く双方を隔てる海峡でもあった。

その海峡は半世紀の間、冷たい風が吹き続けている

冷たい風を薙ぐように、一機のヘリが飛行していた。そのヘリのすぐそばには、見えない境界線が引かれている。

本州側　南日本側の海上には、境界線付近を飛行するヘリをじっと見据えるように、一隻の巡視船が境界線の横に並行して航行していた。

南日本　海上保安隊の巡視船が、境界線ギリギリを飛行する相手のヘリに警戒心を抱きながら白波を立てていた。

すぐそばに引かれた見えない境界線の上空には、北日本側のヘリがこちらからの警告にも関わらず近距離まで接近してきた。

近年続発している北日本側の船舶による領海侵犯。その例は漁船や調査船が多い。南日本側はその度、再三警備に当たってきたが、向こう側の態度は日々エスカレートしていった。北日本側は態度を硬化させ、遂にはヘリ搭載の漁業監視船まで派遣される始末だった。北方軍事境界線、通称41度線は休戦協定の際に宣言されたものだが、北日本側の船舶等による侵犯が増加する傾向にあった。船で海峡を渡って脱北するケースを受け境界線付近の警備は南日本側より嚴重のはずなのだが、それは自国民を逃がさないためだけであり、脱北以外の侵犯は黙認しているようだった。

「こちらは日本帝国海上保安隊である。貴機の行動は明らかな協定違反である。境界線付近での行動を直ちに中止し、退去せよ」警告を呼び掛けるが、相手は応じる気配を見せない。ヘリは境界線ギリギリでの飛行を続け、母船は離れた場所で見守っている。

前までは漁船や調査船が多かったが、最近になってはヘリ搭載の

漁業監視船が出没するケースも目立つようになった。

その船もまた、退役した軍艦を改造したと思われる装備を施していた。船首には30ミリ程度の機関砲などが見え、それなりの武装を積んでいるのが確認できた。

対して海上保安隊の巡視船は軽武装。元々軍艦のような戦闘艦ではなく、あくまで治安上の装備しか許されていない船舶である。外装も一般商船等と大して変わり様がない。退役した軍艦と思われる相手の船と比較すれば、その差は歴然だった。

境界線付近での軍の活動は、両国の平和と安定を脅かす。国内の政治家たちはその言葉を信じ、軍による直接警備によって生じる摩擦に配慮する方針を取った。そのために、日本の沿岸警備隊と呼ばれる海上保安隊が境界線付近の直接警備を一任している。そのすぐ背後には大湊の帝国海軍が身を待機させているが、最初に接触を受ける役を抱える前面には海上保安隊が常に立っていた。

「なにかあつたら、我々では太刀打ちできないな」  
双眼鏡から見える相手の監視船の武装を見て、初老の船長は溜息を吐いた。

「更に、あのヘリも武装なんかしたらたまつたものじゃないです」  
自分たちを挑発するように境界線ギリギリを飛び回っているのは、武装用の攻撃型も存在するZ-9ヘリコプターだった。最近出没するようになった漁業監視船に搭載されているヘリコプターであり、この機による領空侵犯も増えている状況だった。

「……ッ、言っているそばから」  
Z-9ヘリコプターは突然ぐん、と機体を左に傾けると、そのまま一気に高度を下げながら境界線を突破した。巡視船は領空侵犯に対する警告を発する。しかし彼らは更に驚いた。

「な…ッ!？」  
「近いッ!」

相手はこちら側に入ってきただけに飽き足らず、そのまま船の目と鼻の先まで接近してきたのだ。自分たちの目の前に急接近したZ

- 9ヘリコプターは、避けるように左舷側へと通り過ぎてしまった。あつという間の出来事だったが、明らかな危険を伴う挑発行為に、巡視船の乗員たちは声も出なかった。

相手の空に侵入するだけでなく、更に相手の巡視船へ接近するな  
ど聞いたことがない。もしかしても武力衝突の要因にも成り得た。  
しかし彼らは躊躇なくやり遂げた。巡視船への急接近をやつてのけ  
たZ-9ヘリコプターは旋回すると、まるで嘲笑うかのように再び  
巡視船の目の前を通り過ぎ、一部始終を見ていた母船の方へと帰っ  
ていった。

## 01 MDL（後書き）

### 解説

#### 41度線

南日本と北日本の間定められた軍事境界線。北方軍事境界線とも呼ばれ、北緯41度線付近にあることから41度線と呼ばれることが多い。北海道戦争以前は、北日本はソ連が占領した北海道の半分を実効支配していた状態だったために留萌〜釧路を線に結び、42度線

を定めていたが、北海道戦争（祖国解放戦争）の結果、北海道全土を掌握した北日本との事情を踏まえ、津軽海峡の中心線に新たな軍事境界線として設定された。休戦協定により境界線付近三海里を非武装中立海域として宣言されたが、近年、悪化する政治的事情から北日本側からの領海侵犯などが増えている傾向にある。

#### 北日本

正式名称、日本人民共和国。

ソ連の配下、北海道道北にて建国された社会主義国。日本共産党の一党独裁体制。北海道全土を掌握後、首都を札幌に定める。政治総省による厳しい監視体制の下、全国民を抑制している。独裁体制による圧政により、南日本への脱北を計る北日本人が出没するケースが増えており、脱北に対する取締を厳しく張っている。人民赤軍・人民海軍・人民空軍・人民国防軍の四つの系統を持つ人民軍を保有。世界唯一の被爆国（南北の海峡 零部参照）でありながら原子力潜水艦などの核を用いた兵器も保有しているが、原爆などの核兵器開発は確認されていない。経済や軍事は先進国としては充分だが、国民に対する監視体制など自由に対する弾圧は非常に厳しい。

南日本

正式名称、日本帝国。

連合国と対等な立場で講和したため、史実と異なり大日本帝国の形態をほとんど受け継いでいる。君主制国家。

講和後、連合国の政治的介入によって憲法の改正や民主主義化が進んだ（その点に関して、対等な立場で講和したと言う見方が疑問視されることになる）

首都は東京。北海道戦争における軍需景気と高度経済成長により現在は米国に次ぐ経済大国となっている。北海道戦争後、陸海軍に空軍を加え、現在は陸海軍省が統合化した防衛省の下で陸海空の軍隊を保有している。米国とは安全保障上の同盟関係にある。現政権は北日本への以前までの強硬路線からの転換を主張、実施している。

#### 海上保安隊

北海道戦争後に創設された日本版沿岸警備隊。南日本周辺の海上の安全と治安の確保を図ることを任務としている。国土交通省の外局ではあるが、北日本との摩擦を配慮して、北日本との関係が一際悪化した1994年頃から海軍から軍事境界線付近での直接警備を担当するようになる。あくまで海上警察的な組織だが、境界線付近では常に軍事的緊張に立ち合う役を買わされている。

Z - 9

北日本側の漁業監視船に搭載されていたヘリコプター。人民軍も保有している。海上保安隊の巡視船に急接近すると言う挑発行為を見せた。

以前投稿させて頂いた作品は、この作品の前振りのようなものかもしれません。元々本作を主体に案を練っていたのですが、先に9月

に投稿した作品は簡単に書き下ろしてみたものです。  
本作は、前作と異なり時代は現代。日本が南北に分断してから、半  
世紀が経った頃の物語です。  
また劣らぬ部分が目立つことになるかと思いますが、暖かい目で見  
てくだされば幸いです。

## 02 塩辛い過去

狭い空間に、何も見えないほどの暗闇。

そこに反響する悲鳴。

自分がどこの世界にいるのかわからなくなってしまつような切迫した状況が、自分を揉みくちやに塗り固めようとしていた。

悲鳴と交差するように、響き渡る甲高い銃声と、外板を叩くようなエンジン音。

十名分の悲鳴と恐怖を満載にした小さな漁船は、荒れ狂う嵐に翻弄されたかのような状況に陥っていた。

恐怖に身を固められる俺の手を、馴染み深い暖かな感触がぎゅつと包み込む。それが闇に引きずり込まれようとしている俺を唯一繋ぎ止めている存在だった。

恐怖のあまりに周囲と相反して声が出ない弟を安心させるかのように、夏苗姉さんの優しいげな声がかげられる。

「大丈夫、大丈夫だよ。お姉ちゃんがついてるから」

そう言ってくれる夏苗姉さんの声も、若干震えているように聞こえた。周りの大人たちが子供のように泣き叫んでいる中で、本当の子供である俺や夏苗姉さんの方が声をあげていないというのは、何だか不思議な光景である。

「かな……、ねえ……ちや……」

渴き切った声は、まともに言葉を紡がせなかった。心の中では夏苗姉さんを叫ぶように呼んでいるのに、口は全然声を出してくれなかった。

周囲を激しく渦巻いていた波が、突然、流れを変え、俺たち姉弟を巻き込むように濁流として襲いかかってくる。その濁流から義父と義母が庇うように守ろうとするが、その濁流は義父と義母さえ巻き込み、俺たちは家族もろとも外へ流された。

今まで暗闇に染まっていた視界が、久しい光の侵入に覆われる。

同時に新鮮な空気は肺におくられ、それをじつくりと味わう暇もなく体を甲板に投げ出され、鈍痛が体全体を襲った。

「大丈夫、コウ!? きゃあッ!」

夏苗姉さんが後から流れてきた濁流　船腹から飛び出す大人たちに押され、俺のように甲板へ叩きつけられる。俺と夏苗姉さんを突き飛ばして外へ飛び出した大人たちは、何かを喚きながら小さな漁船の上で右往左往していた。

「伏せろッ!　伏せろッ!」

悲鳴の合間に聞こえた義父の声。直後、甲板の上にいた数人の大人たちが、血しぶきをあげて次々と倒れていった。

響き渡る機関銃の銃声。撃たれた大人たちが、甲板に倒れ、ある者が海へ落ちる。

「ひっ!?!」

倒れていた俺の目の前に、ごろんと転がる死体に小さな悲鳴を漏らす。恐ろしい程に目をカツと見開いたまま、ぴくりとも動かない死体から、俺は目が離せなかった。

「コウ……!」

同じく倒れていた夏苗姉さんが、俺の視界を塞ぐように手で俺の両目を覆う。そして俺はそのまま体を引き寄せられた。

「起きちゃダメ。起きたら、撃たれる……!」

尚も聞こえる銃声。甲板に密着させたお腹から、暴れるようなエンジン音と船の激しい揺れが伝わる。

「お前たち、これを着なさいッ!」

義父の声。そして同時に光を取り戻す視界。その視界には、姿勢を低くし、服に他人の血痕を浮かばせた義父が二つの救命具を両手に抱えた姿があった。

少し大き目の救命具をただ着せられるままになる俺。その隣で、義父から救命具を受け取ったまま着る様子を見せない夏苗姉さんが叫ぶ。

「お母さんはッ!?!」

「……………」  
夏苗姉さんの言葉に、俺に救命具を着せる義父は苦虫を噛み潰したような表情のまま何も答えなかった。義父の無言の返答に、夏苗姉さんは絶望の色を表情に染めた。

「そんな……………」

「お前も早く着なさい。間に合わなくなるぞ！」

人形のように動かない俺に救命具を着せた義父は、今度は夏苗姉さんに救命具を着るように促す。しかし夏苗姉さんは泣きそうな顔でふるふると首を横に振った。

「お、おとうさんは……………」

「お父さんは後から行く！ お前たちは早くここから逃げろッ！」

「逃げろって言われても……………どこに逃げれば良いのッ?!」

夏苗姉さんの言う通り、ここには逃げる場所なんてどこにもない。何故なら、周りは全て、海なのだから。

義父はいいやいやと泣いて拒む夏苗姉さんに、無理矢理救命具を着させた。そして救命具を着た俺たち姉弟を、義父が両腕に抱きかかえた。

船はいつの間にか停まっていた。視界の端に、黒煙が映った。

「エンジンをやられたか……………」

俺と夏苗姉さんを抱えた義父の声が聞こえた。

再び響き渡る銃声。視線を向けると、白波を立てて近付いてくる警備艇が見えた。その船上には、機関銃を構えた兵士たちの姿があった。

「嫌だ、嫌だよッ！ お父さんやお母さんも一緒じゃなきゃ、嫌だッ！」

泣き叫ぶ夏苗姉さんを、俺は初めて見た。

そんな夏苗姉さんを、義父が宥めるように優しくに声をかけた。

「お父さんもお母さんも、お前たちのそばにずっといるさ。だから、早く行きなさい」

「だったら……………一緒にいこお……………?」

「約束する。おとうさんは、お前たちとずっと一緒にいてあげる」

ぐずる夏苗姉さんを、義父が優しいげな表情を浮かべたまま、そつと夏苗姉さんの頭を撫でていた。

「浩。お前が、お姉ちゃんを守るんだよ」

俺はその時、驚いたということさえ気付かなかったと思う。

ただ、義父の優しいげな表情だけが覚えていた。

いつも俺が、夏苗姉さんたちに守られてきた。いつかは俺が、守る側になるうと心に決めていた。

でも、俺はここで初めて義父に言われた。

「ただ。俺は、その約束を守れない。」

「何があっても、生き延びてくれ」

その言葉を最後に、義父は俺と夏苗姉さんを突き飛ばした。海へ放り出される中、俺は見てしまった。聞こえてきた銃声と共に、血しぶきをあげながら撃たれる義父の姿を

辛うじて救命具によって浮かぶ俺は、時々押し寄せる海水を飲まないように必死に波間を漂っていた。海中にある体はまるで宇宙に放り出されたような感覚だった。

視界の端には、さっきまで俺と夏苗姉さんが乗っていた小さな漁船が燃えている。そこに乗っていた他の大人たちの末路を、船から投げ出される前に俺はこの目で見ていた。

「コウ、そこにおいて……！ 今、お姉ちゃん行くから……」

離れた海面から、同じく救命具を着た夏苗姉さんが、波が高い海面の中を必死に掻き分けるように泳いでくる。しかし波は容赦なく、俺たち姉弟を引き離そうとしていた。

「お姉ちゃん絶対にコウの所へ行くから……そこで待って……」

「！」

夏苗姉さんは必死に俺に向かって声をかけてくれる。しかし、夏苗姉さんの姿は一向に俺のもとへ近付いてこなかった。

逆に、夏苗姉さんがどんどん俺から流されるように離れていく。

「夏苗……姉ちゃ……」

俺は引き離れていく夏苗姉さんに向かって、手を伸ばす。

遂に夏苗姉さんの声が聞こえづらくなっていく。そして視界の端に見える、燃える漁船。俺は最後に見た義父の撃たれる姿と言葉を思い出す。

約束した。俺が、夏苗姉さんを守ると

しかし、伸ばした手さえ夏苗姉さんに届かない。

夏苗姉さんの姿が、少しずつ波間の奥へ消えていく。

「夏苗姉ちゃん！ 夏苗姉ちゃん……！」

俺は必死に叫ぶように、夏苗姉さんと呼ぶ。

しかし海中に放り出された体は、いくらもがいても何も触れることはなかった。

まるで、夢の中にいるかのようだ。

現実ではないみたいな感覚。

そう、これは夢だ。

夢の中であるはずなのに

舌にまとわりつく海水の塩辛い味、体に纏わりつく不気味な感覚だけが、鮮明に感じられた

「ッ！」

八雲浩は、汗でシートに粘りつく嫌な感触と共に目を覚ました。

上半身を起き上がらせた浩の体は、汗で張り付いたシャツから、

鍛えられた強靭な肉体を誇張していた。軍人として鍛え抜かれた身体は、昔の自分との離別を毅然として告げている。

まだ海水の塩辛い味が舌に纏わりついている口を潤すため、浩は洗面台へと直行した。蛇口から流れ出る水をコップに満たし、その中身を口元に洗浄するように流し込んだ。

「また、あの夢か……」

今まで数えきれないほどに見てきた夢。あの時の記憶が、悪夢として蘇ってくることは今までも何度もあった。

少し濡れた唇を拳で拭いながら、浩は机の上に佇んだ写真立てに視線を向けた。

そこには、かつての家族　　子供時代の自分と姉、両親との初めての写真が収められていた。

そこに映っている自分は、ひどく無愛想。あの人たちに招かれたばかりで、まだ心を開いていない時期だった。

そして自分の隣に写る姉が、ひどく優しい微笑みを浮かべている。

「……夏苗姉さん」

あの海で、離れ離れになった姉。姉に守られてばかりだった自分が、やっと姉を守ろうとした。だが、それを叶うことができなかった。

あの真つ暗で狭い船腹に、姉や両親と一緒に身を潜め、自由を夢見ていた。自分たち家族を含め、同じ夢を抱いていた他の大人たち。そしてそんな夢を打ち砕くように現れた、国境警備隊の警備艇。次々と撃ち殺される大人たち、燃える船、海の波間に揉みくちやにされる自分、全てが今でもはつきりと思い出せる。

義父の提案で、脱北を決意したあの夏。この国にはない自由と安住の地を求め、党を裏切った自分たちに待っていた結末は、ひどく陰惨なものだった。

あの船の上で義父と義母は死に、海の上で離れ離れになった夏苗姉さんの行方もわからず。

海面に浮かんでいた自分を、国境警備隊の兵士たちが救出し、一人だけ生き残ってしまった。

しかしその後には待っていたのは、苦痛に満ちた尋問だった。脱北

の罪を問われ、自分の知っている情報を全て吐き出すまで許されなかった尋問の日々。死ぬより辛い精神的苦痛。自我を失う程の肉体的苦痛。人間の知る『痛み』を総じて味わされたような地獄の一週間。

あの時はまだ子供で、脱北の主犯だった義父が死んでいたことで、強制収容所行きは免れた。

全てを失った浩は、そのまま使い捨てのように軍へ入れられた。

お前のような裏切り者なんていつでも切り捨てられる、と言わんばかりの酷な訓練と任務の数々を乗り越えている内に、浩は年に似合わないキャリアを昇りつめていた。

しかし、いくらキャリアを得ても、自分がいつでも切り捨てられても構わない任務を与えられていることは変わらない。

それは、今回も同じだった。

「この国に生きて帰っても、どうせ何も変わらない……」

机の上に置かれた写真立てのそばには、一通の辞令があった。

ベッドから立ち上がった浩は、その辞令の紙面に視線を落とす。

そこにひどく簡潔に書いてある内容は、今までと特に変わらない、

正に簡潔明瞭で、ひどく酷なものだった

## 02 塩辛い過去（後書き）

解説

脱北

北日本からの亡命、脱出行為を指す。北日本の政治体制、生活環境に耐えられず南日本へ脱出する人々を『脱北者』と呼ばれる。北日本政府はこれを厳しく取り締まっている。

国境警備隊

41度線付近の警備を管轄する人民国防軍の部隊。主に脱北者の取締を執り行う。

海の上、救命具で浮く恐怖。波が高いと塩辛い味を経験する。

### 03 近衛の戦士

この国の人間にとっての精神的な拠所とはどこを指すだろうか。かつて主君の名を軍旗に掲げ戦った前大戦当時は、宮城であったことは間違いない。たとえ戦争に勝とうが負けようが、国民はきつと宮城に前を向けたことだろう。日本の中心は、帝都東京の中心と問われれば、彼らは迷うことなく宮城と答える。

しかし今はどうだろう。今や国家的中枢としての意味合いでは、政治家たちのひしめく国会議事堂がこの国の中心だろう。東京の中心は宮城、という答えは現在となっては古びた解答かもしれない。しかし、少なくとも夏苗にとって、宮城は現代においてもその心を抱く者の一人だった。

「ここにおられましたか」  
夏苗はさがしていた少女を見つける。

少女が振り向くと同時に、髪飾りの鈴が、ちりんと鳴った。宮城の美しき庭を背景に、まるで芸術画として映える少女の姿は、また彼女も野に咲く花のように可憐だ。それだけに収まらない凛とした雰囲気、彼女の全てを表わし切るには足りない程であった。

皇族の身边護衛と安全を主任務とする近衛の軍服を身に纏った同性の夏苗であっても、時々彼女の美しさにはどきりとさせられる。

それは、幼馴染と呼べる程の時間を費やしても、変わらなかつた。

「中尉？」

「！」

彼女の呼び掛けに、ハッと我に帰る夏苗。

「どうかされましたか？ どこか、身体の具合でも……」

「いえ、何でもございません。失礼致しました、殿」

夏苗の口を、少女の細い指が塞いだ。

少女の細い指の触れる感触が唇から伝わる。夏苗は無垢に微笑む少女の笑顔を見た。

「二人だけの時は、そういう堅苦しいのは無しにしようって言いましたでしょう？　ね、かなちゃん」

かなちゃん、と愛称で呼ばれた夏苗は、少し困ったような表情になる。

「しかし、殿下……」

ここは宮邸と違って帝国の大城、宮城内である。他の者に見られれば　　と思うと、親愛なる主であり唯一無二の親友である彼女の命であっても戸惑われた。

しかし少女は決して譲らなかつた。

「ほら、かなちゃん」

「……」

昔から逆らえない。いや、仕える主人に逆らう気など毛頭ないが、それはまた別の話だ。夏苗は小さく溜息を吐くと、口を開いた。

「わかりました、陽和殿下」

「……」

「……わかつたよ、陽和ちゃん」

「うんうん」

満足そうに頷く少女、陽和を前に、夏苗は今日も敵わないのだつた。

主従関係とは別の関係を有する二人。帝国宮家の一つ、伏見宮家の第一皇女である伏見宮陽和は、近衛兵団の八雲夏苗中尉にその身柄を幼少の時より護衛されている。

近衛兵団とは、陸海空軍とは独立した宮内省直属の武装組織である。

帝室の護衛と安全の維持を受け持ち、帝室に身を置く皇族一人一人の護衛と安全を優先する。

八雲夏苗は、伏見宮家第一皇女の陽和の護衛の任を受け持った近衛兵団の兵士である。

「ここには私たち二人しかいませんから、そんなに心配しなくても大丈夫ですよ」

「しかし……いや、でも……こんな所、万が一にも他の宮家の方々に知られたら……」

「心配しすぎですって、かなちゃん。私たち、そんなに悪いことしてますか？」

「……………」

「本来なら、友達に身分なんて関係ないですよ」

一国の皇族である陽和自身、夏苗には本来果てしなく遠い存在のはずだった。

そもそも、自分は元々この国の人間ではない。あの海峡を境に、決して相容れるはずがなかった二人。

しかし今や自分の命は、自分のものではない。目の前にいる、彼女のもの。

「さつきまで大勢の人たちの前に出ていたんです。少しはリフレッシュさせてください」

「それに関しては、本当にお疲れ様」

この新年が始まって三日も経たない内の最初の責務それは、新年を国民に挨拶する恒例行事だった。

宮城で行われる一般参賀は、両陛下を始め皇族の者たちが一年の一番最初に国民へお出ましになる恒例行事だ。陽和もまた皇族の一人として参加している。舞台に現れる自分たちを迎える大勢の国民へ顔を出すことも、皇族としての立派な責務である。

こうして一連の宮家が、宮城に集まることもこういう行事がない限りはそう多くない。

久しぶりに訪れた宮城の庭園の端で、身分を越えた二人の少女が友人同士の他愛のない話に花を咲かせていた。

「かなちゃんもお疲れ様ですよ。本当に感謝してます」

「お礼を言われるようなことはしておりません。私は……ただ、この命を救ってくださった伏見宮家に恩を報いているだけに過ぎません」

そっと胸に手を添えて、優しく囁くように、陽和は言葉を紡いだ。

夏苗は帝国の帝室

その宮家、伏見宮家にその命を救われた。

日本を分かつ津軽の海峡で、家族と離れ離れになった夏苗。波は強引に弟から自分を引き離し、南へと連れていった。泳いでも泳いでも、弟のもとへ行けない。逆に引き離され、弟の姿が波間へ消えていく。

今まで守ってきた弟。いつも、私が付いていなければいけないと思っていた。

だから離れてはいけない。無我夢中に泳いでも、意地悪すぎる波は自分を掴んで弟のもとへ行かせようとしなかった。

やがて波間に漂流していた夏苗は、国境付近の警備任務中だった南日本の駆逐艦に発見され救出された。その時、海峡のご真ん中に一人漂っていた夏苗を助け出したのが、帝国海軍国境保安隊指揮官であった伏見宮定優親王海軍少将であった。

救出後、身寄りのなかった夏苗を憂いた伏見宮定優親王が、自ら夏苗を引き取った。

そして、夏苗は近衛兵団の兵士として定優親王の娘である陽和のそばに仕えられた。

そうして幼い時より一緒にいる二人。彼女たちは、互いに信頼し、強固な絆に結ばれた家族であり親友でもあると、互いの胸の内に強く思っていた。

「ほらほら、堅苦しいのは無しって言いましたでしょう」

「おことはですが……殿下ご自身が私に対して敬語のままというのは、やはり不適切ではないかと存じます」

「私は常にこうですから、仕方ないでしょう。気にせず、昔のように親身に話せば良いのです」

「そう仰られても……」

「えーい、もうっ!」

「!?!」

突然夏苗に飛びかかる陽和。夏苗は突然の事態というよりは、彼女という存在に体が抵抗を示すことができなかった。

「こうして子供のようにじゃれあえば、きつと昔のように……！」

「ひゃ……で、殿下……ッ！ やめ……ッ」

「なにを食べたらこんな大きく育つのでしょうか？ 人とは不平等のかたまりですね」

「で……殿下、はしたないですよ……ッ！ ひゃう……ッ！ や、やめて陽和ちゃ……！」

庭園の端で、蝶も踊る穏やかな日の下、二人の少女の声と共に鈴の音がうるさく鳴っていた。

「視察……？」

近衛兵団の司令部にて、団長に呼ばれた夏苗は鸚鵡返しのように聞き返した。

「そうだ。 今月の末頃に、伏見宮陽和殿下が大湊へ行かれる予定だ」

「大湊……」

本州の頂上にある大湊は、北日本との国境線が敷かれる津軽海峡を目の前にした、帝国における最前線であった。下北半島の脇には国境警備と防備を主とする海軍の国境保安隊の基地があり、戦前から続く帝国海軍の古き伝統を受け継いだ軍港が存在する。

以前は陽和の父である伏見宮定優親王が指揮官の座に置いていたことがあるため、陽和第一皇女殿下による軍事視察はその由縁があった。

「……そこで、殿下の護衛の任に就く貴様も当然同伴させてもらう」

「は」

行く先で護衛を務めることは、普段と変わらない。

しかし今回の視察は、夏苗にとって、そして彼女たちにとって特

別なものになり得るものだった。

「貴様もよく知っているとと思うが、あそこは北の大地に最も近い場所だ。そんな最前線に殿下が行かれることを、強く肝に銘じておけ」

「はっ！」

「それだけだ。下がってよろしい」

「は、失礼致します」

団長に敬礼し、部屋を退室しようとする夏苗を、団長の声が呼び止めた。

「待て、中尉」

「は………？」

「何を見、思おうと、貴様は過去も未来も関係ない近衛の誇り高い兵士である」

「……………」

「殿下と共に、行ってこい」

自分と陽和の関係を数少ない人間の一人　帝国国民になると同時に近衛の兵士になった自分に、指導を教授してくれた恩人その恩人のさりげない気遣いに気付きながら、陽和は無言で一礼すると、今度こそ部屋を退室していった。

長く続く廊下を歩きながら、夏苗は団長の言葉を思い出した。

自分は、近衛の誇り高き兵士。つまり帝室に仕える守護者である。国家の軍隊ではない組織として、軍とは独立した指揮系統と武力を持つ近衛兵団は、皇族の身と財産を護るためだけに存在する。

夏苗にとって、命の恩人である伏見宮家に対して恩を報いるには、近衛兵団は最適な存在だった。

元いた国が最も嫌った帝室に、自分の命を捧げることを決意した新たな人生。

あの忌まわしい国から一人だけ逃げ延び、生き残ってしまった自分が唯一成せる道。

あの海峡で失った家族を背負い、夏苗はこの国で戦いながら生きることに決めた。

守ろう。弟を守ってきたように、あの娘を守り通そう。

結局、私にはそれしかできない。

最後まで守れなかった。だから、今度こそ守ってみせる。

夏苗の心は、強くその思いで埋め尽くされていた。

### 03 近衛の戦士（後書き）

解説

宮城きゅうじょう

日本帝国君主の平常時における宮殿。明治君主の東京行幸により江戸城が名称を変え、現在の宮城に至る。

宮内省

日本帝国の行政機関。帝室関係の国家事務、君主の国事行為に当たる外国の大使・公使の接受に関する事務、帝室の儀式に係る事務等を司る。帝室の安全、管理を管轄する上で軍とは独立した独自の武力『近衛兵団』を保有している。

近衛兵団

軍とは独立した宮内省直属の武装組織。最精鋭かつ最古参の部隊組織として帝国君主を始めとした皇族と宮城を警衛する任務を帯びている。

宮家みやけ

帝室で代々皇族の身分を保持する一家を指す。

伏見宮家

四大宮家の一つ。皇族軍人の宮家としても名高く、常に自ら前線に立つという方針でいるために、軍の士気を高める役目を抱えている。『皇族は国民の模範となるべし』と言う宮家の共通認識を前線において発揮する役。

## 国境保安隊

41度線（北方軍事境界線）を警備監視する帝国海軍の部隊。海上保安隊との連携を取ることによって境界線付近の警備を実施している。

史実の伏見宮家（皇族）とは一切関係ありません。この物語は何もかもがフィクションです。

## 04 北に吹く風

2014年11月16日

日本人民共和国首都・札幌

道内で最大の規模と人口を誇る札幌は、祖国解放戦争の末に勝ち取って以来、北日本の首都として半世紀もの間機能している。三度の市街戦の果てに、多くの血を流した結果手に入れた首都札幌は正に北日本の栄光の象徴だった。

北海道全土が北日本の国土として統一した後、首都とされた札幌は祖国解放戦争後、経済成長の波に乗って急速なインフラ整備を受け、北海道一の都市部として活性化した。

首都に恥じない規模を誇り、札幌の中心部を東西に横切る広場空間は革命大通広場と呼ばれる。無機質なビル群が左右に並び立つ中央で緑に染まる革命大通広場は長さは1.5kmも連なり、札幌の都市計画の基盤として設けられ、現在に至るまで札幌の中心を占める最も重要な広場となっていた。

建国の父とされた初代党首の銅像も建っている革命大通広場は正に札幌の象徴。綺麗に整備されたその空間は党のプロパガンダの下で成り立っていることを強調するように、至る所に党のポスターやスローガンが掲げられている。

札幌市中心部・人民中央議会議事堂

かつては北海道の本庁舎として建築され、日本共産党が札幌を首都に定めた頃から、議会議事堂へと生まれ変わった煉瓦造りの西洋館である。党、政府の会議室等にも使用され、日本人民共和国の象

微的存在であり”赤レンガ”とも呼ばれて南北日本関わらず有名な歴史ある施設だった。

そんな赤レンガも、今や白い雪に染まりつつあった。しかし赤いレンガの象徴を止めることはなかった。

議事堂前に植えられた、雪が積もるイチヨウ並木のそばに、一台の高級車が停った。その車から現れたのは、日本人民共和国現首相、まぶちひろたか馬淵博隆であった。

雪が降る凍てつくような寒さもものとせず、馬淵はゆっくりとした足取りで、議事堂内へと移動した。

正面玄関から入った馬淵を迎えたのは、三連アーチの構えをもつホールと大階段だった。アーチには薔薇の花模様の装飾が植え付けられ、西洋風を徹底したデザインが隅々まで行き渡っている。

秘書官を後ろに引き連れ、階段を上がり赤絨毯が敷かれた廊下を進むと、『人民中央会議室』と刻まれた立看板が目についた。その横にある扉を開くと、馬淵の入室を知った顔ぶれが表情を引き締め、一斉に席から起立した。

秘書官が扉を閉める音を背中越しに聞きつつ、馬淵は自分の席へ歩み寄った。

「座ってください」

馬淵の言葉に、全員が席に着いた。それを見届けると、馬淵も自分の席へと腰を下ろす。

「同志諸君、揃っているな。それでは始めるとしようか」

馬淵は自分が入った時から緊張した空気に変わっていることは既に察していた。特に、顔ぶれの中でも一部の者に至っては。

「都間同志、昨今の我が国周辺における情勢をご存知かね」

「は、遺憾ながら我が共和国を取り巻く情勢ははっきりと申し上げて、厳しいものであると言わざるを得ません」

「そう、よく言ってくれたよ都間同志」

緊張の汗を光らせた外交大臣の都間の顔色を内心面白そうに眺めた馬淵は、更に他の顔ぶれを見渡した。

皆、二人の会話を聞いてそれぞれの表情を表していた。焦りと困惑、強がった色など、様々だった。

「佐久間同志、ロシアが南の傀儡に対して東シベリアにおける油田の共同開発の提案をあげたのは事実なのかね？」

話を振られた軍需大臣は、ぴくりと瞼を痙攣させた。じとりとした汗を浮かべながら、軍需大臣は口を開いた。

「そうでありませう、同志閣下」

真に苦渋に満ちたような表情で、軍需大臣は唇を噛み締めた。

「我が国はソ連、イラクやシリアといった友好国から石油を輸入してきました。しかし、ソ連崩壊から世界情勢が変わるに連れ、憎き資本主義に寝返ったロシアは輸出相手国を我が国から南へと転換する方針を取るようになり、イラクは米帝の侵略戦争により討たれ、シリアは愚かしい国民民主の革命に倒れ、我が国へ石油を寄越してくれるものは現在となつてはどこにもおらんようになっております」

石油、資源といったものは国家の栄養源であり、これが無くなれば国は死すだけである。枯渇し、悲惨な末路になることは、日本人ならば歴史から既に嫌というほど学んだはずだった。

南北分断から半世紀、北日本は東側陣営が圧倒する東アジアにおいて優勢な立場にあつた。ロシアの恩恵を授かった近代兵器、経済大国に成長する中華人民共和国との良好な経済関係、半島の朝鮮国との関係もある。

しかし冷戦が終わり、21世紀に入つてからは情勢が一変した。ソ連が崩壊し、遺産を受け継いだロシアは経済のパートナーを南日本に転換し、それに伴い北日本に対する石油輸出量は大幅に減少した。

友好国だった中東諸国のほとんども、米国との戦争や民主化の波に吞まれ、北日本は石油備蓄量の消費量と輸入量の不釣合の広がり警戒心を抱いていた。

「ロシアの国営石油最大手ロスネフチが、オホーツク海大陸棚の

『マガン鉱区』と『東シベリア鉱区』の油田開発をめぐり、南日本企業の参画を求めることを決定。ロスネフチは既に今月初めに南の経済産業省と協議を行い、それらの石油埋蔵量などについて、今年中にも共同調査を開始することを同意しています。有望な鉱区が見つければ、探鉱を手掛ける南日本との合弁会社を新設するとも言っており、将来的に石油精製工場や一連の石油化学企業の設立についても合意している話です」

北日本にしてみれば、南日本は恋人を奪った憎き相手である。長年愛の蜜に甘んじてきたものが最も奪われたくない相手に奪われると、その嫉妬心は憎悪を増して恐ろしく変わる。

「我が国の石油備蓄量は、もし石油の輸入が止まった場合、以降の消費量を試算した結果尽きるのもそう遠くはありません。もって一年、と言ったところですよ」

今回の南日本とロシアの油田開発について、ロシア経済紙コメルサントは、昨今の北日本とロシアの間で起きたトラブルが絡んでいるとの見解を報じた。

ソ連崩壊後、ロシアは北日本に対して石油輸出量を大幅に減らしたが、完全になくなったわけではない。辛うじて北日本が21世紀に入っても存続を維持できるほどの石油は北日本に輸出されてきた。樺太から通じたパイプラインも新年から稼働したばかりで、完全に見放されたわけではない。

しかしそのパイプラインの運送費用に関して双方の意見が分かれ、ロシア側は北日本が負担すべきだと主張するのに対し、北日本側はロシアの負担だと訴えた。

結局、北日本側がそれなりの負担をすることで解決したが、その前後にあったロシアと南日本の油田開発合意の動きは、北日本に対する牽制であると分析された。

「確かに我が共和国とロシアの間で、石油や天然ガスの価格などをめぐり、大小の対立が絶えないことは認めよう。しかしその度に我が共和国は譲渡してきたはずだ。我が共和国に与えるはずだ

った石油が南の傀儡連中へ渡るなど、けしからんことだッ！」

「落ち着きたまえ、嶺同志」

丸々とした顔をトマトのように赤くする産業大臣を、馬淵が宥めるように制した。

「我が国の石油備蓄量がもって一年と言ったね？」

「はい、あくまで石油の輸入が止まった仮の話ですが」

「それは、どういうことだね？」

その場にいる全員の視線が、軍需大臣に釘付けになる。皆の視線を浴びた軍需大臣は居心地が悪くなるような心境を必死に隠しながら、乾いた口を開いた。

「もう一度言いますが、ロシアはソ連崩壊後、我が国への石油輸出量を大幅に減らしました。更にイラクは米帝の侵略戦争によって我が国と友好関係にあつた政権は既に亡く、シリアやイランなどの他の中東諸国も米帝に敵視され、将来イラクの二の舞になる可能性も捨てきれません。これらの状況から察するに我が国のエネルギー事情は、少なくとも改善する余地は見られません」

米国の敵である限りことごとく駆逐され、そしてそれはエネルギー不足の加速として影響される。更に民主化の傾向に限っては、また別の問題として影響されるので厄介なものだった。

「（確かに資源は大事だ……だが、それ以上に）」

馬淵は人知れず拳を握らせた。馬淵の中には、この場にいる誰よりもある議題を強く懸念していた。

「（我が共和国の存続　つまり、党首様の後継に関しては絶対に障害を生み出してはならない）」

本来なら、この席には首相の自分ではなく党首が座り、共に祖国の行く末を論じ、最良なる決断を下すはずだった。しかし高齢を重ねる党首は病弱し、会議にも出られる程の余力はなかった。近年の人民最高会議で決定された次期党首後継者への後継のための準備もある。

更に党首の病状は、国民が知る以上に重い。

すなわち、現在の日本人民共和国は時代遅れの帝国主義者共にあって、抹殺できる最高の機会である。

万が一にもこの機に乗じて、奴らが我が国に脅威を向けたとしたら

「……そんなこと、許されてたまるか」

幸い、米帝はともかくとして、南の現政権は我が陣営の中でも弱腰と評判だ。

他者を犠牲にしても自らの私腹を肥やすことしか能のない資本主義者共に、我が共和国は決して負けはしない。

やられる前に、こちらから先手を打つ

「間取同志……41度線付近で、南の連中が軍事演習を行おうとしていると聞いたが」

「は。誠に遺憾ながら、南の帝国海軍が軍事境界線付近での軍事演習を画策している模様。我が人民軍はこの南の暴挙に対し、親愛なる党首様と共和国のため、毅然とした対応を取る所存です」

「よろしい。さすがに、よくわかつているな同志よ」

国防大臣のはつきりとした言葉の意志に、馬淵は満足そうに笑みを浮かべて頷いた。

これこそが、共和国を半世紀存続させてきた先軍政治。

目には目を齒には齒を　　だ。

「同志諸君、これは偉大なる党首様のお言葉なのだが」

馬淵の言葉に、一同の顔ぶれが一気に引き締まった。まるでその場に崇拜する党首本人がいるかのように。

馬淵は『党首の言葉』を用いて、馬淵自身の言葉を並べた。

「（そう……きっと、これが正しいのだ。　どんな手段を取ろうとも、祖国の勝利は絶対なのだから）」

中東を発祥に民主化などという愚公が蔓延しているようだが、そんなものに祖国や党が脅かされることなどあつてはならない。

祖国のため、党のため　　我が国は如何なる手段を用いても、生き残る道を選ぶ。

それが、国家の本来あるべき姿なのだ。

「少し、南の連中に思い知らせてやるつ。なあ、同志諸君？」

同時刻

日本帝国帝都・東京

渋谷

今日の東京の朝は少し肌寒かった。外に行く人々は慣れない空気の冷たさに身を焦がし、それぞれの向かう所へと行く。渋谷のスクランブル交差点は大勢の人がごった返し、行き交う人々の吐く白い息が交差点に充滿した。

「北日本との北方軍事境界線を接する津軽海峡の41度線付近で、北日本国家北洋海上局所属の漁業監視船の搭載ヘリコプターが、警戒監視中の海上保安隊の巡視船に急接近するという事態が発生していたことを、国土交通省、海上保安本部が明らかにしました。昨日、我が国との北方軍事境界線を侵犯し、海上保安隊巡視船に急接近したのは、北日本の漁業監視船『幌別ほろべつ』の搭載ヘリコプター『Z9』であり、関係筋によると

交差点を見下ろすような大画面に映されるニュースキャスターは淡々とした表情と声色で、事の内容を読み上げた。画面には青森の竜飛崎から海の向こうに見える北日本 北海道の大地がズームアップで映され、被害にあった海上保安隊の巡視船が航行する姿などが次々と映し出された。

「過去にもこのような事例があり、二週間前の駆逐艦『夕霧』への同艦載ヘリによる異常接近が記憶として新しいです。このような再三に渡る北日本側の危険を伴う挑発行為に、政府は事態に対する強い抗議と再発防止に向けての要請を」

「おはよう。君がこんな所にいるなんて珍しいな」

喫茶店内のテレビに夢中になっていた夏苗は、声の主の方へと振り向いた。視線を向けた夏苗に対して、穏やかな笑みを絶やさない中年男性がひらひらと手を振っていた。

「あなたが私をここに呼んでおいて、その言い草は意味がわかりません」

「それでもそう言わないわけにはいなくなってしまうんだよねえ」

先に注文したコーヒーを口に運ぶ行為で彼への視線を外した夏苗は、暖かなコーヒーの味に舌を染み込ませた。その間、一切彼に見向きせず、苦笑した彼が向かいの席に座ったことを察する。

「でも本来なら、夏苗ちゃんも年頃の女の子としてこういう街へ遊ぶのもおかしくないんだけどね」

「……………」  
夏苗は彼の発言を無視するように、コーヒーを呑み続けた。

「夏苗ちゃん、あまりこういう所に行かないだろう？ どうだい、この後僕と」

「佐山大尉、ご用件を先に」

コーヒーを置くと同時に、少し強い語気でぴしゃりと言いつつ夏苗に、彼は思わず言葉を詰まらせた。

「悪かったね。気を悪くしないでくれ」

ばつが悪そうな笑みを浮かべて、彼は言う。夏苗はそれさえ無視するように 口元をハンカチで拭いた。

解いたマフラーから覗いた襟首には、桜の階級章。帝国海軍大尉、

佐山寿樹は口の前で手を組むと、研ぎ澄ましたような声で語り始めた。

「それじゃあ本題に入らせてもらつと、貴方方の移動は海軍側で万全の準備を整える方向で進めておくよ。現場に到着してからのスケジュールも、海軍と殿下の都合に合わせ、調整する方針で異論はないね？」

「ありません。それと、殿下の身辺護衛に関してですが」

「ああ、海軍も勿論身を殿下に捧げる思いで遂行するつもりさ。君がいるなら、余計な心配はいらなそうだが」

「佐山大尉、私がどれだけ貴方に期待を寄せられているかは存じませんが、現場は本物の最前線であることは貴方が一番よく理解しているはずです。勿論、私は必ず殿下をお守り通す所存ですが、一瞬の隙も外堀に生じさせたくはありません」

凜とした意志の強い声で、夏苗は佐山に対し断言するような口調で言った。そんな夏苗の言葉、その意志の体現に対し、佐山は驚きの感嘆の息を漏らした。昔から いや、昔より更に誇り高くなつた彼女の変化に、佐山は笑みを綻ばせた。

「君は、実に優秀な近衛の兵士だね」

兵士としての体現を強く表す夏苗の姿 その反面、先に述べた願望に近い夏苗の年頃の女の子としての姿が一段遠のいていく現実を知って、佐山は綻んだ笑みの裏に複雑な感情を過ぎらせた。

「……そうだ。あそこは我が国における本物の最前線だ。今はあそこも帝都とは比べ物にならない程の雪が降る寒い時期だが、同時に帝都とは比べ物にならない程、戦場に近い場所だ」

「……………」

本物の最前線 分断し、兄弟であり最大の仮想敵国でもある北日本との軍事境界線が引かれた海峡を目の前にしたかの場所は、軍事的緊張が最も高い場所だった。テレビのニュースに報じられていた軍事境界線での揉め事を含めた昨今の南北情勢 南北の海峡に吹く風当たりは、一層冷たく、強くなっていた。

「昨日、北の艦載ヘリが海上保安隊の巡視船に接近したと聞きましたが……」

「ああ、不愉快だが事実だよ。こちら側に堂々と侵犯した挙句、警備監視中だった巡視船に急接近……舐められたものだよ」

珍しく不機嫌そうな色を見せる佐山は、口元に組んでいた手を解き、懐から煙草を取り出した。それを見定めた夏苗が、隙を与えない俊敏さで口を開く。

「この席は禁煙です」

「……参ったね」

ちよつとイラつくと煙草を吸いたくなる癖があつてね　と、苦笑しながら説明する佐山に、夏苗は煙草をしまつように無言で鋭い視線をさす。

「あなたも苛立つことがあるのですね」

「そりゃああるさ、僕も人間だもの。舐められたら怒るのが普通の反応というものさ。……例外もあるけどね」

佐山は煙草を元の懐に戻すと、通りかかったウェイトレスを呼び止めてコーヒーのおかわりを注文する。

佐山が注文したのを見定めるように、夏苗は呟くように言う。

「しかし軍は何をやっているのでしょうか。どちらとも」

津軽海峡の中心線に定められた北方軍事境界線は、半世紀前の北海道戦争の休戦協定にて、互いの軍が境界線を警備、監視を実施することで合意したはずだ。しかし今となつては帝国海軍は大湊基地から境界線付近の警備を実施しつつも、海上警察組織である海上保安隊が事実上の治安維持を一任されているのが現状。そして向こう側は、脱北に対しての取締は非常に厳しくやっているが、それ以外の侵犯は見て見ぬフリをしている。脱北の見分け方をどうやっているか気になるが、軍事境界線の意味が希薄になっているのは事実だった。

「今回の事件も、漁業監視船と言うが　実際、あれは軍艦だ。退役した軍艦を改装して運用してるのが真実なんだから……対し

て我が方は、軽武装の巡視船が海軍を差し置いて軍事境界線を警備だなんて笑っちゃうよね」

「そんな体たらくのくせに、海軍は演習をやるうだなんて……余りの極端さは、危険ではないですか？」

「仕方ないよ。ギャップが極端なのがこの国さ。その国の軍隊も然り」

「……………」

南北の日本の事実上の国境線となつている41度線に、度々出没する北の漁業監視船。しかし漁船がいるわけでもないのに境界線付近に現れる行為は、警備に携わる海上保安隊や海軍の神経を逆立たた。列島の南北情勢を含め、西方にある中国の動きや朝鮮国の問題もあり、北東アジアは複雑だ。これらの諸外国の脅威に囲まれた南日本や米国の出方を、北日本は観察しているのかもしれない。何を考えているのかわからないが、快くない行動を起こしているのは確かだった。

「演習は予定通り行われる。これは決定事項だよ。そもそも、この演習に参加する将兵たちを激励するために、殿下がわざわざお越しになられるのだろうか？」

「……………」

夏苗は、向けようのない怒りを抱いた。

自らが置かれた立場を正確に認識できない祖国の在り様。内向きな志向が強まる政治と軍部の体たらく。その墮落したかの者たちの下らない意志により、蔑ろにされる帝室と国民。

「（殿下はこんな者たちの意向に振り回されていると言うの……）」

「……………」

果たして愛しき皇女殿下が、その命を賭してまで赴く価値があるのだろうか。文句一つ言わず、決して苦しい様子を見せない健気な少女を、目と鼻の先に火薬の匂いが漂う現場に行かせることは、果たして最善の選択なのだろうか。

「……………」

わかりました。では、そのような方向でお願い致します」

軍の連絡員である佐山との調整会合を終えた夏苗は、建前の行動で終始した。席を立った夏苗に、佐山も支度をしながら声をかけた。

「ここは僕が奢ろう。夏苗ちゃんは」

「いえ、自分の分は自分で払います。お気持ちだけ頂いておきます、佐山おじさん」

佐山が何かを言う前に、夏苗はさつさと支払いを済ませて喫茶店を出て行った。

「やれやれ……相変わらず、難しい娘だ」

すっかり冷めてしまったコーヒーを、佐山は一人ごちながら口に含んだ。

喫茶店を出た夏苗を、冷たい外気が迎え出た。

扉の閉まる鈴の音を背後に、夏苗は大勢の人々が行き交う路上に足を踏みしめる。隔離した店内から外の世界へと出た夏苗を待っていたのは、人々の喧騒と冷たい空気、そして降り始めた雪の結晶だった。

「……もう、冬ね」

冷たい東京の空から降り注ぐ雪を、夏苗は白い息を口から靡かせながら仰ぎ見た。雪を降らせる東京の空は、どこまでも暗雲だった。

## 04 北に吹く風（後書き）

解説

札幌

日本人民共和国の首都。北海道戦争（祖国解放戦争）において最も激しい戦闘が行われた場所。最終的に北日本軍の占領下となり、停戦後、北日本の新首都となる。人口やインフラ等は道内一を誇る大都市。

人民中央議会議事堂

旧北海道本庁舎。現在は北日本の議会議事堂として使用されている。西洋館としての外観は変わらず、赤い煉瓦の象徴的な造りから、市民の間では赤レンガとも呼ばれている。西洋館らしい内部の内装は文化遺産に値する品格を有している。

北日本のエネルギー事情

冷戦時、北日本は主にソ連やイラン等の中東諸国から石油を輸入してきたが、現在に至っては深刻なエネルギー不足に悩まされている。エネルギー供給や運送に関わるロシアとの摩擦もあり、国内の燃料事情は国民の生活だけでなく先軍政治の象徴する軍部にまで影響を及ぼしている。対してエネルギー事情の改善を進行させている南日本の現状と自国の状況を比較し、何らかの行動措置を画策している。

先軍政治

日本人民共和国の公式イデオロギー。国家の全てにおいて軍事を優

先ずると言う政治思想。人民軍を社会主義建設の主力とみなしている。1997年に北日本党首が国内メディアを通じて明記して以来、当思想に基づく政治方針が北日本の基盤となっている。

今回を始め、南北日本におけるエネルギー事情が物語に多少関わっていく予定です。

## 05 闇の宣告

同志諸君、今日は私から皆に伝えておかねばならないことがある。それは我々の未来を、現在を形作るのに絶対に必要なものではないこと。諸君は覚えているだろうか、日本帝国主義に不条理な立場を強いられ、弾圧された日々を。君主による圧政の下、我々の子供たちが侵略者の手先として戦場に送り込まれ、数多のアジア人民を巻き込んだ事実を。我々は決して忘れてはならない。無数のアジア人民を虐殺した日本帝国主義、我が日本人民と欧州の人々を虐殺したアメリカ帝国主義、それらの悪しき資本主義陣営を我々は許してはならない。我々はこの悪しき帝国主義の打倒を決し、世界への社会主義建設の実現を目指すことを誓う。そして全ての日本人民が解放される日が来ることを願い、一刻も早い日本全土の解放を実現させなければならない。そのために、私は日本の解放への第一歩として、ここに日本人民共和国の建国を宣言する！

1949年 日本人民共和国建国宣言・共和国政府日本共産党初代党首

我が共和国と盟邦ソビエトの多くの勇士たちが血を流した祖国解放戦争は、その血を代価に北海道の解放を成し遂げた我々の勝利として終わったと言うべきだろう。しかし我々は奴らの非道なる所業を忘れてはならない。道内各地で多くの市民を虐殺し、更に函館へ原子爆弾を投下したアメリカ帝国主義と日本帝国主義を。我々はこの永遠に癒えない傷を抱え、その痛みを脳裏に焼き付けるのだ。その痛みを数倍に返してやる時を待ち続けている。

1972年 赤き北海道 著者：元日本人民赤軍参謀総長

兎に角、あの国での生活は不自由極まりなかった。建国当初は北の楽園と豪語し、如何に幸運な国であるかを政府は国民にアピールしていたが、私達はそれが全くの嘘であることを思い知らされました。実際は政治総省による監視体制の下、誰が監視員なのかもわからない。迂闊に党や政府への不満を漏らすようなら、すぐさま秘密警察がやって来て逮捕されます。私の友人も、何人が彼らに連れられて二度と帰ってくることはありませんでした。あの国に自由と言う文字は存在しません。経済は潤っても、得をするのは上級市民のみ。ただでさえ軍事が最優先です。そんな国に、人並みの生活ができると思いますか？だから私達はあの冷たい海を渡って脱北してきたのです

1995年 とある脱北者による証言

日本共産党政府によるネット規制は、北日本においては極めて『正常』である。党や政府、指導者に対する不適切な情報は一切禁じられ、政府の検閲が常に敷かれている。北日本には南日本と同じように憲法があり、言論の自由は認められているはずだが、実際にそんなものは三次元に限らずインターネットにおいても存在しない

2001年 日本共産党政府によるネット規制の間 著者：  
田辺信次郎（帝都大学教授）

南日本の映画を観たが、北日本の特殊部隊の兵士が射撃訓練の際、確実な命中率を上げるために目標の隣に仲間の兵士を立てて射撃訓練を行う描写が劇中に描かれていたが、実際はもっと過酷な訓練がある。それは訓練生が山奥に捨てられて自分の力で戻らなければならぬ訓練だ。俺はその訓練に参加した時、パラシュートで降下した時に体が木の枝に刺さって重症を負ったが、誰も俺を助けてはくれなかった。結局、俺は傷の痛みを耐えながら集合地点に戻ったが……もし俺が途中で死んだら、俺の死体は回収されること無くそのまま放置されていただろう。俺の死体は、次の訓練の時、また同じように訓練に参加した兵士たちの、愚かな兵士という見せしめとして使われていたのかもしれない

2004年 脱北した元北日本特殊部隊兵士の証言

どこまでも続く平野 皮膚を突き刺すような冷たい風が吹き渡っていた。

ここがどこなのかも知られず、彼らは極寒の地に置き去りにされた。彼らに渡されたのは、氷点下に耐えられないような薄い上着だけ。食糧も、水さえなかった。彼らは葉のような薄い上着を着込み、寒さに凍えながら冷たい風が吹く平野をさ迷った。しかし東西南北、どこへ行っても彼らの行きたい所へは辿り着かない気がしてならなかった。

さ迷うにつれて、彼らは数を減らしていった。四人いた彼らは、一人一人、その数を減らした。1人が減るたびに、彼らは叫び、逃

げ惑った。夜闇が彼らを喰らい尽くそうと襲いかかってくるのだ。そして遂に　　彼は一人になった。枝や石に挟られ、血だらけになった足を引きずり、彼は静かな闇の中を歩いていった。

深淵の闇が果てしなく続く林の中、彼は限界に近かった。

何故、俺がこんな目に　　彼は、何度目かわからない自問を繰り返した。

しかし闇は何も答えてくれなかった。自問をする彼に、答えを与える優しさはない。世界は残酷で無慈悲に構成されていたから。

そろそろ、奴らがくる　　毎日この時間に、一人ずつ殺された。今日は絶対に、最後に残った自分の番だ。

彼はまるで犬のように上下の歯を揃えた口から荒い息を吹き出した。極限足る興奮。体がまるでヤカンの中のお湯のように沸騰し、指の先まで痺れてくる。毛の一本まで、神経が細かく通っているかのような。

こんなことで殺されてたまるか、死んでたまるか、こんな死に方があってたまるか　　彼はあまりの興奮に、言葉が口に漏れていることを自覚していなかった。彼にはそんな余裕さえ皆無だった。

「  
「！」

ガサ、と微かに草の擦れる音がしたならば、彼は即座に剥いた目玉を振り向かせた。しかし何も起こらない。その正体はキタキツネかもしれないと、冷静な彼なら考えていたかもしれない。

しかし彼はそれが敵の到来だと思った。立ち止まり、彼は周囲に囲む林に耳を研ぎ澄ます。微かな音の一つも聞き洩らさない気だった。

その耳が　　鼓膜を掠るような空気の切れ目が生じるのを感じた。

「……………ツぁ!？」

耳に何かが掠った。咄嗟に身を避けたが、即座に火薬の匂いが鼻

をついた。音のしない射撃。自分が狙われていたことを瞬時に察知した。

「う、あ、あああああああッッッ!!!」

眼から涙を溢れ出せ、鼻水とヨダレで顔をぐしゃぐしゃにした彼は走り出した。自分の命が奪われそうになったという事実は、彼のぎりぎりまで保っていた精神を崩壊させた。聞き覚えのない理由で秘密警察に逮捕され、幾度と重なる尋問に耐え、この地に投げ出され極限まで蝕まれた精神は、ここで遂に崩壊の一途を辿った。

後は自分の命を守ると言う生物の本能に従うだけだった。彼の内に、既に理性は欠片もない。

爪が剥がれ、ぼろぼろになった指は真っ黒に染まり、無数の傷を刻んだ足を土に何度もめり込ませながら、彼は林の中を駆け抜けた。彼の獣のような悲鳴が闇に響き渡る。その彼を、ぴったりと追う存在が徐々に近づく

鋭い痛みを雪崩れる精神の渦にのみ込みながら、彼は崩れていく脳内で今までの記憶を遡った。この世に生まれ落ち、両親の下で育てられ、学校に行き、就職して家庭を持った。しかし、そんな平凡だった生活はあっけなく崩れ落ちた。その端で、最愛の妻の顔が浮かんだ。最後に見た妻の顔は、酷く嗤っていた

なんで　　なんで

愛し合っていたと思っていた妻に、何故、自分が密告されなければならなかったのか。

妻の父親が党員だったと言う小耳に挟んだ情報は、彼の中では些細なものでしかなかったのに

「どあゝしゝてゝ……どあゝしゝてゝえゝえゝ……ッッ」

包んだ声で、彼は走りながら泣き叫んだ。そんな彼の悲墜の叫びに、それは答えた

「知らない。死んで」

右の茂みから何かが彼に飛びついた。彼は喉が破けるような悲鳴を上げた。彼は足をくじきながらも、必死に拳を振り回した。それは最早人間ではなく、今正に捕食されようとする哀れな獲物の最期の抵抗だった

彼の拳を受け流し、その流れで彼の腕を締める。動けなくなった彼の首元に、鋭利な刃物を忍ばせた。一瞬間の間に、夜闇に煌めいたナイフは彼の頸動脈を切り付けた。

闇に噴き出す血の噴水。彼は自身の血に溺れながら地に伏せた。転がった彼の遺体の傍らに、ナイフを手に下げた迷彩服の少女が無表情に見下ろしていた。

「そこまで」

少女の腰に備え付けられた無線に、男の声が紡がれる。それから間もなくして、それなりに開けた道から二つのライトが照らし出された。その光の根源であるジープを、少女はじつと見据えて待っていた。

少女の前に停まったジープが、夜闇から少女の存在を光に浮かび上がらせた。光に照らされた少女の肌は眩しい程に真っ白で、一点の染みもない。そこから滑らかに生じた目鼻と、細かに紡がれた桃色の唇が、少女の美醜が如何に天高い格であるかを存分に知らしめていた。しかしそれだけではなかった。

少女の首から頬にかけて、少女のものではない振り返り血が浴びせられていた。少女はそれを拭いもせず、ただ獲物の血を顔の半分の皮膚に被ったまま、無機質にジープから降りてきた男に視線を向けた。

「訓練はこれにて終了だ、同志興侶上級兵士。これより撤収に移れ」

周囲の夜闇を溶け込ませたかのような軍服の襟首に見える階級章

は、男の年齢に似合わない数だった。

「了解、同志八雲上尉」

興相璃乍上級兵士は敬礼を捧げる。八雲は答礼。その直後、夜闇からぬつと浮き出すように大型の輸送ヘリが上空に現れた。

璃乍は八雲に背を向けると、輸送ヘリが降下する地点に向かい、夜闇の中へ消えていった。

一人残された八雲は、足元に転がる男の死体をただ見下ろした。

北日本が誇る最精鋭の特殊部隊。その訓練の一環が、ここに終了した。部隊のリーダーである八雲浩上尉は、訓練の犠牲となった哀れな死体を冷めた目で見下ろした。彼の目は　昔からだ。

訓練に選ばれた囚人。本物の殺人を行わせることで兵士の育成を図る、この段階の訓練で殺される囚人は、政治犯と断定された者を適当に抜擢する。南日本の法律では死刑はおるか裁判にすらかけられないような行為のために、彼らは裁判もかけられず、訓練の犠牲と言つわかりやすい死刑宣告・執行を受ける。

さすがに同情に値する囚人を、あえて殺すことにより兵士としての残酷さを学ばせることがこの訓練の目的だ。八雲は既にその訓練を幼い頃に経験し、そして何度も見届けてきた。そこに馳せる思いもない。

ガサツ……

微かに動いた草の茂みに、八雲は視線を向けた。ジープが照らす光の先に、ひよっこりと現れたのはキタキツネだった。

キタキツネは目の前から漂う死の匂いに気付きながら、じつと八雲の方を見据えていた。キタキツネが見詰めているものは、八雲の足元に転がる死体なのか、八雲自身なのかはわからない。

やがて、キタキツネは大きな尾を翻して闇の向こうへ消えていった。遠くから聞こえるヘリの音を背後に、八雲はジープの方へと戻

る。八雲が乗り込んだジープがその場を去ると、転がった男の死体が闇の中へ溶けて消えた。

## 05 闇の宣告（後書き）

解説

### 政治総省

北日本における秘密警察・諜報機関。徹底した監視体制を敷いており、北日本国民の恐怖の的となっている。南日本に対するスパイ・工作員を送り、政治的、思想的な南侵も目的に実行している。これらの活動から、かつての友好国であった東ドイツの国家保安省シュタージを参考にしたと考えられる。

更に軍への監視として、各部隊などに政治職員を派遣し、軍人に対する監視や統制を図っている（軍におくられた職員は政治将校として兵士の監視に当たる）

## 06 死地の部隊

北日本の特殊部隊は 質を省いても、数は多い。  
内戦より半世紀、南侵を諦めなかった日本共産党の不屈さが自国における特殊部隊を育て上げた。

停戦から10年と経たぬ内に特殊部隊の前身を作り上げ、組織の改編と粛清を繰り返し、今や8万の兵力を誇っている。

数は多くとも、質もまた当然見過ごせないものだ。

その中でも最精鋭と言われる部隊が、第803部隊である。

彼らは南との戦争時、敵国内に潜入し後方で錯乱させる任務を帯びているが、平時に限っても過去のテロ等の事件の関与を疑われる程、南日本にとっては要注意すべき存在だった。

彼らを生み出したものが一体どんなものなのか。想像を絶する過酷な訓練。それは日本共産党の南侵に対する執着が強固なものの現れに過ぎない。

党首様の命令があればいつでも死ぬ覚悟がある その忠誠心の表れは、別の意志によるものの偽りに過ぎなかった。

「いつでも死ぬ それは、いつ死んでも良い存在と言う裏返しでもある」

第803部隊の訓練施設。そのブリーフィングルーム。部隊の兵士たちが集う場には、一人の若い男が彼らの前に立ち、注目を集めていた。演説をする彼の背後には日本人民共和国の領土である、千島列島を含めた北海道の地図があり、その隣には共和国の指導者様の額縁が飾られている。

「貴様達は俺を含め、この国にとっては使い捨てるための駒のようなものだ。 党や祖国にそう思わせる程の経緯を個々は持つていると思うが、今の我々にはそんなものは最早関係ない。ただ、俺

「私たちは死ぬために生きるだけである」

若い男は、襟に見える階級章やそれを与える功績を記した勲章を胸にさげている。部隊の指揮官として彼はこの場に立っている。彼の目つきはひどく鋭い。そんな彼の目を、部屋の隅に控える将校の女が見詰め、彼の自虐的な演説を聴き、微かに笑った。

「俺たちは他の奴らとは異なる。だが、同時にそれが俺たちの救いでもある」

彼の　八雲浩上尉の言葉を、兵士たちはびくりとも動かずに聴いている。

「俺たちの目的は、死ぬことだ。この国から出て行くことだ。それを忘れず、任務に精進せよ！」

演説は終わり、兵士たちの起立、敬礼に見送られる。浩は答礼し、解散を告げた。

同等の比率である男女混同、まだあどけなさすら残す平均年齢と外見　そんな奇妙な集団が部屋からいなくなると、それを見定めるようにその場にずっと立っていた浩に声が掛かる。

「政治将校わたしの前でよくあそこまで言えたものだな。相変わらずだが」

浩の天然の鋭い目つきが彼女に向けられる　黒い長髪を繊細に揺らし、真っ白な肌と整った顔立ちの上に、掛けられた眼鏡は彼女の美貌をこの上なく形成していた。踵を鳴らし、彼女は微笑をたたえながら浩の方へ歩み寄っていった。

「そこまで死にたいか、同志上尉」

浩のそばまで歩み寄り、眼鏡の奥から浩を見据えた彼女は若干仰ぎ見る。

「先も言った。それが俺たちの任務だと」

「前から思っていたが、どうやら同志上尉は誤解をされているようだ」

びくりと微かに動く肩。彼女　政治総省から派遣され、第803部隊の政治将校として籍を置く東堂沙希中尉の滑らかな唇が微

笑した。

「我が共和国の8万の特殊部隊の中でも最強と謳われた第803部隊は、忠誠を誓う党にとつても最早無くすには惜しい存在だ。それを知ってか知らずか、同志上尉はまるでその第803部隊を全滅させるかのような勢いで死ねと連呼する。それが純真なる党への忠誠心だと思いたいが、同志上尉は別の意味で純真にそれに従おうとしているように思えてしまう」

「……………」

「同志上尉、第803部隊を無くすことを党は望まない。そしてそれは妖艶比類ない政治将校として名高い彼女の　囁きだった。」

彼女の人差し指が、滑らかに浩の唇を伝い、最終的に頬へ触れる。

「私自身も、それは望むべきものではない」

彼女の細い指が浩の頬を愛おしく撫で、そっと離れる。

「私は同志上尉と第803部隊の兵たちを監視する義務がある。変な気を起こさないように、な」

そう言つて、沙希はクスクスと笑つた。

「……………同志中尉、貴官こそ俺たちを誤解している」

「そうかな？　ふふ、そうだと良いがな」

「忠誠心の対象である党や祖国に仇名す愚公など金輪際考えてはいないよ。勿論、反共的な意図は皆無だ」

「その言葉、信じても良いのだな」

軍の施設と言えど、壁の内部に盗聴器ぐらいは仕込まれているだろう　しかし、浩はまるで臆していなかった。

「ああ」

浩は一言頷き、沙希は　浩の胸に手を添え、踵を上げた。

背伸びした沙希の唇が浩のものと重なり　数秒間の静寂が訪れた。

お互いの柔らかかな心地良さと湿り気を共有する。離れた互いの間

に細い橋を引き、沙希は踵を付けた。

「わかつていると思うが、私は裏切れないぞ。 同志上尉」

ほのかに頬を朱に染め、変わらない微笑を浮かべる沙希の言葉に、浩は無言で頷いた。微かに赤の色を浮かべる反応を示した沙希に対し、浩の顔は鋭い目つきを含め、全く変わっていなかった。浩の脳裏にあるのは、ただ、新たな任務を告げる一枚の辞表だけだった。

## 06 死地の部隊（後書き）

解説

### 第803部隊

南日本への潜入工作を主任務とする北日本の特殊部隊。北日本国内の特殊部隊の中でも最精鋭と呼ばれる程の最強部隊だが、指揮官の八雲浩上尉を含め、隊員個人に謎が多い。浩が配属された頃は今ほどの名誉を得ていなかったが、浩の加入以来、現在の名誉を至る程の成長を遂げた。その功績を含め、浩自身も年齢に見合わない地位と名誉を得ている。

普段の作品では主人公に対する表記を名字で書いてしまう癖がある私ですが、この作品ではその方向だとかややこしくなる恐れが出てしまうので、一般に見受けられるファーストネーム表記で書かせていただきます。

## 07 帝国の不安（前書き）

後書きにて、とりあえず今までの登場人物紹介。

## 07 帝国の不安

2014年11月18日

日本帝国・帝都東京

本格的に冬が近づく11月の中頃、東京を始めとした関東地方各地で初雪が観測され、僅かに雪が残った帝都の地を、内閣総理大臣

葛島秀雄かしまひでおが乗った車が一路首相官邸に向かっていた。

葛島は流れていく外の光景に、その皺が端に刻む細い瞳を向けた。雪にまみれながら路上に座り込む人々の姿がちらほらと見えた。鹿島はそれらの光景を、ただ流れていくのを見届けるだけだった。

葛島は、一年前に起こった帝国の一大事件を思い出す。

2013年1月13日

静岡県東部を震源とする大地震が東海地方を中心に発生した。首相官邸内を発祥に地震対策本部が設置され、国内は再び災害による混乱に呑みこまれた。

日本列島は様々なプレートが集結した世界に類を見ない地震大国であり、二つの国家に分断されてからも、地震と言う災害だけは南も北も共通して持っていたものだった。

北日本においても北海道南西部や東部などで大きな地震はあった。しかし南日本は特に、関西と東北という二つの大震災を経験していた。

静岡で発生した大地震は南日本にとっては関西、東北の大震災に次ぐ、戦後における大規模な災害となった。過去の震災の教訓もあり、対応の迅速さは評価に値するものではあったが、南日本は再び

震災によるダメージを受ける羽目になった。

「原発が運転を停止していたのは不幸中の幸いか……少なくとも、東北大震災の二の舞は防いだということの良いんだな？」

過去の東北で発生した大震災に関連し、甚大な被害を受けた原発事故の教訓を得て稼働を停止していた浜岡原発も地震とそれに伴う津波被害が、地震発生前から懸念されたが、東北の大震災にあつた原発事故のようなことは起こらずに済んでいた。

しかしまだ安心はできない状況であることは変わりないし、しかも世間では浜岡原発の被害に根も葉もない噂を付けて迷惑な憶測が広まっている。

「そうです。しかし……世間はそう考えてはいません。国民の原子力に対する反発はこの東海地震でますます膨らんでいる模様です」

「また全ての原発を止めると？」

「……………」

原子力エネルギーは東北の大震災以降も国にとっては手放すには惜しいものにならず、しかも当時の政権は国民に真実を明かすことを躊躇った。

おかげで民自党の信用は原子力エネルギーの安全と共に失墜し、葛島が総理大臣の座に昇ってもその傾向は変わらなかった。信用というのは一度失ってしまえば、取り戻すことは非常に難しい。

しかし何があっても、エネルギーは国家にとって生命の源なのだ。それがたとえどんなに大きなりスクを背負うものであっても、石油すら自国で産出できない無資源国家が贅沢を言っていられる余地はない。

「東北の大震災と違い、今回はあの時のような失態は繰り返されておりません。しかしそんなことは世間には関係ありません。信じるのは、自分のみです」

「それもそうだ……我々を信じる、と言う方が無理な話だろう」

「そ、総理……」

原発はやはり不要　　かつて、国内で初めて原発が運転を開始した時は、未来のエネルギーとして期待された。しかしその正体が如何に恐ろしいかが実証されると、こぞって反対の意が日本中から溢れ出た。

「（そう……あの頃からただ一つ、『資源』と言う名目のために躍起になったものだ）」

あの震災で帝国は大きな転換点を迎えた。原子力に代わる代替エネルギーの促進、無資源国家としては最大の課題となった。

今や少数であるが幾つかの原発は稼働を再開（世論の原発反対の意思は変わらないが）、諸外国とのエネルギー確保のための外交も重ねてきた。

おかげで諸外国との共同開発、輸入を取り付けることに成功し、帝国は着々とエネルギー事情の改善を進めている。

やはり原子力から得た恩恵には到底辿り着かないが

「（我々日本人が如何に、原子力に頼ってきたのかが思い知らされるな……）」

日本周辺に眠る、原子力エネルギーの代替に成り得る新エネルギーの採掘と開発が実現すれば、そんな悩みも解消されるのだが

世の中と言うのは、そう簡単にはいかないようだった。

「　しかしこの列島にいるのは、我々だけではありません」

「　！」

葛島は顔を上げた。ふと見渡してみると、広い会議室に閣僚たち、そして防衛省からの軍関係者も同席している姿が目に入った。ここは首相官邸内で開かれた安全保障会議の場であることを、葛島は思い出した。

「こちらをご覧ください。米国の偵察衛星が撮影した写真です」  
葛島の正面　大きなスクリーンには、何枚もの上空写真が映  
されていた。平地、港、滑走路、様々な場所の上空写真がある。

「これは二日前に撮影された、北日本の主要の航空基地、軍港、  
ミサイル基地などの写真です。ご覧ください、北日本主力の戦闘  
機部隊がある千歳基地には多数の機体を確認できます。　室蘭や函  
館などの軍港においても艦艇、船舶の出入港が活発になっています。  
同じく、道東各所のミサイル基地でも　」

若い軍関係者の一人がスクリーンの写真を元に説明する。スクリ  
ーンが明滅を繰り返しながら写真や比較データ等を映し出し、その  
度に闇の中から彼らの姿を浮かび上がらせた。彼らは微動だにせず、  
映り変わったスクリーンを注視し続ける。

「　この北日本軍の行動が活発化している要因は、おそらく  
我が海軍の境界線付近で予定されている演習に対しての行動ではな  
いかと分析されます」

「なら、演習を中止にすれば向こうの気も収まるのではないか？  
無理にする必要は　」

閣僚の一人が言った言葉に対し、言い終わらない内に即答する。  
「それは絶対にあつてはならないことです。　この演習は諸外国  
からの侵略を想定し、我が国を境界線にて迎え撃ち防衛することを  
目的としています。　外部からの圧力に屈し、演習を中止させるこ  
とは既に侵略される前に我々が敗北するということですよ」

「しかし、悪戯に双方の間で摩擦を作るのは本末転倒と言つべき  
じゃないのかね？」

軍人と政治家は相容れない部分が多い。戦争を起こさないため  
にあるのは軍人と政治家に共通した部分ではあるが、『現場』と言  
う最も異なる部分が双方の間を隔てている。それはお互いが理解を  
得るには難しいものだった。

「一つ、良いか？」

閣僚の一人が手を上げる。経済産業大臣だ。

「疑問に思うのだが、何故この時期に動き出す？ 奴らを動かしているものは、一体何なんだ」

北海道戦争以来、半世紀の間、分断した国家として在り続けた南北日本。この半世紀の間、停戦でありまだ一応の戦争状態とは言え、北海道戦争のような大規模な衝突はなかった。ここまで活発な軍事行動も前例がない。

故に目立ち、怪し過ぎる光景だった。これでは余計にこちらの警戒心を強めるようなものだ。

北日本の燃料事情が悪いことは軍なら勿論、政治家まで知る周知の事実だ。そんな国の軍隊が大きく動ける程、燃料に余裕があるとも思えない。

いや、だからこそか そんな気付きたくない事実には薄々勘付いてしまう者も何人かいた。

「まさか、ヤケになつていとは思えないが」

「…… 案外、間違いでもないかもしれない」

「おいおい、悪い冗談はよしてくれ。 たまったものじゃない」  
共産主義国家は何を考えているのかわからない。

盟主だったソ連が滅び、冷戦が終わつたと言つのに、この国は未だに敵性陣営に囲まれた不幸な境遇を強いられていた。

これほど相性が悪い国々に囲まれている国は、そうそう無いだろう

「一つ近い可能性としては、向こうの後継者問題が絡んでいることもあり得ます」

北日本を統治している日本共産党のトップ その党首の後継者問題が近年からの北日本の議題だった。最近療養中と言われている北日本の現党首に関して、政府は情報収集に勤しんでいる。それに関連して、北日本国内では次期党首への後継問題が浮上していた。次期党首は既に決定されていると言う未確認情報はあるが、それは現党首が逝去しない限り確証が得られない。

次期党首への後継に絡んで、内外への圧力として軍事行動を起こ

す可能性は否定できなかった。

「最近、姿を見かけないが……だからこそ、その可能性は大きいな」

「何であれ」

葛島が、席を立つ。辺りの視線が葛島に集まった。

「如何なる理由であれ、目の前に危険な動きがあることは事実だ。これに対し、我が国は適正な方法を以て事態に対処しよう」

緊張感が、室内に漂った。理由はどうかあれ、半世紀前以来の危機がこの国を襲うかもしれない事実は明確だ。そのことが彼らの息を呑ませた。

「ところで……」

葛島はふう、と息を吐くと、真っ直ぐに軍関係者たちへ視線を向けた。

「もし向こうが攻めてくるとして、やはり……」  
今までスクリーンを元に説明していた彼が頷く。

「青森沿岸　　大湊への攻撃が先手となるでしょう」

青森県、大湊

北方軍事境界線がある津軽海峡を目と鼻の先にした大湊は、南日本における最前線と名高い港だ。国境保安隊を含む多数の戦闘艦が集結しており、日々軍事境界線付近の警備に当たっている。

雪が舞う大湊飛行場の滑走路に、四発のプロペラを回したOPP-3Cが姿を見せる。

着陸体勢に入ったOPP-3Cは真っ白な滑走路へ滑るように、そのまま雪降る最前線の地へと降り立った。

「雪です、かなちゃん！ 真っ白、そして寒いですっ」  
機体から降り立った陽和は、降ってくる雪を掴むように手を上げながら、子供のように走った。

もこもことした真っ白な防寒着に、その上に大き目のマフラーで顔の下半分を埋めた陽和は正に皇女ではなく一人の少女のようだった。

「殿下、あまり走られては……」

「きゃうッ！」

夏苗が言い終える前に、見事に滑って転ぶ陽和。

「殿下……！」

顔を青くして、慌てて駆け寄る。

「ご無事ですか、殿下……！」

「ち、ちめたい……」

夏苗は、鼻の上に雪を乗せた陽和を支えるように立たせる。身体に付いた雪を丁寧に払い、大事がないか注意深く観察する。

「お怪我は……」

「大丈夫です、ちよっと滑っただけです。 えへへ、恥ずかしいですね……」

「これから移動となります。 あまり無理をされるのは……」

「そうですね、ごめんなさい……雪は、久しぶりですから……」  
顔をほのかに赤くした陽和は小さな笑みを浮かべた。夏苗は目の前の少女らしい笑顔を前に笑みがこぼれた。

しかしそんな少女たちを歓迎していないかのように、雪が降る空は淀んだ灰色を濃くさせていった。

## 07 帝国の不安（後書き）

この辺りで第一部に登場したキャラクターたちをご紹介します。

北日本

八雲浩  
やくもこう

北日本最精鋭の特殊部隊と呼ばれる第803部隊の指揮官。人民国防軍上尉。孤児院から八雲家の養子として引きとられ育った。過去に脱北を図った罪として一時期は尋問を受けたが、使い捨ての扱いで軍に入れられる。家族を失い、自らも傷つけられた過去から北日本と言う国家や党に対して深い憎悪を持っている。死に急ぐように過酷な訓練や任務を乗り越え、若い年齢に見合わない名誉と地位を手に入れる。鋭い目つきは生まれながらのもので、その特徴に纏わる様々な過去を持つ。

東堂沙希  
とうどう しゃき

政治総省から派遣された第803部隊の政治将校。階級は中尉。浩の恋人。党や祖国に深い忠誠心を抱き、常に敬愛する党首様のために自分が何を出来るかを考え行動する『党首の子供』。足る北日本人。第803部隊、死に急ぐような浩を政治将校として、恋人として監視する。

興梠璃々  
こうもり りり

第803部隊の兵士。階級は上級兵士。あどけなさすら残す少女ではあるが、その小柄で細身の外見に見寄らず、他の兵士よりまた更に長けた冷静沈着の殺戮者。ある理由で収容所送りになった両親の罪を自らも被り、陰惨な過去を経験している。

まがちひろたか  
馬淵博隆

日本人民共和国首相。取り巻く国内外の情勢を鑑み、祖国の存続を第一に考える男。祖国の救済のためなら手段を選ばない。祖国の柱とする病床に耽っている党首の後継問題のため、強硬的な行動へと出る。

南日本

やくも かなえ  
八雲夏苗

宮内省直属の近衛兵団に所属する女性兵士。元は北日本出身だが、家族と共に脱北を図り、皇族の伏見宮定優親王の部隊に救助される。目の前で両親を失い、愛弟と離れ離れになり一人だけ生き残ってしまったことを悔やみ、今度こそ同じ過ちを繰り返さないと決意して近衛兵団の兵士となる。恩人の伏見宮家に報いるため、伏見宮陽和殿下の護衛に従事している。

ふしみのみや ひより  
伏見宮陽和

帝室と深い繋がりを持つ四大宮家の一つ、伏見宮家の第一皇女。代々、皇族軍人としての家系である伏見宮家の子孫として、陽和自身も軍籍に置かれている。籍上では帝国海軍中尉。幼少の頃より皇族軍人としての英才教育を受けているはずだが、実際は子供っぽい性格でドジな部分がある。夏苗とは幼馴染で親友としての仲もあり、夏苗からも主君として尊敬と敬意を抱かれている。

葛島秀雄かしまひでお

日本国内閣総理大臣。過去の大震災からの原子力エネルギーの失墜によって悩まされたエネルギー事情の改善に奔走したが、その功績を評価されず厳しい世論の声に、内閣支持率も低迷気味。常に国の行く末を憂いて行動し、彼を知る人物からは高潔な政治家として評判だが、中々報われない。北日本とは融和政策で衝突を避けようとしているが、彼個人としては国内情勢を優先したいのが本音で、北日本に対してはあまり関心等を寄せていない。

佐山寿樹さやまとしき

帝国海軍大尉。夏苗と海軍の間の連絡役を務める。夏苗とは長い縁がある人物の一人で、陽和の元教育係。

団長

近衛兵団の団長。司令官。夏苗の近衛入団に深く関わり、夏苗の事情を知る数少ない人物の一人。

## 08 神の子(前書き)

ここから第二部です。

白く染まった大湊の飛行場に降り立った伏見宮陽和は臣下の八雲夏苗近衛兵団中尉を引き連れ、北方軍事境界線の警備を司る帝国海軍の大湊基地へと訪れた。近々行われる軍事演習に対する視察が目的だった。

「こんな時期に演習と言うだけでも微妙であるのに、殿下をそんな危険地帯に向かわせるなんて上は一体何を考えているのでしょうか」

ここに来て改めて今回の陽和の視察に夏苗は不満を漏らした。昨今の北方軍事境界線での緊張をお上が理解していないはずがない。何せ、この演習に対して相手から直接文句を言われているのだ。国防のために行う演習自体に不満があるわけではない。北の言うことに同調するわけでもない。

ただ、タイミングが気に入らない。そこへ親愛なる彼女を行かせると言う意図が怒りを感じさせた。

上のくだらない思惑や都合の結果が導いたもの。それが今回の演習と陽和の視察を決めた原因だった。

「こういう所はまだ子供なんだねえ……」

隣で夏苗と同じように扉に背を向けた佐山が、ぼつりと呟くように言った。そこに本人に聞こえない気配りなど皆無だった。

「私は殿下の身を案じているだけです」

冷静に、しかし内側に込められた強い気は、佐山には筒抜けだった。

「過保護だね」

「……………」

夏苗は無言で佐山に睨み付ける。それを受け止め、佐山は肩をす

くめた。

「殿下のご準備が整いました」

扉の向こうからの声に、夏苗と佐山は扉から離れ、迎える体勢に入る。夏苗と佐山の目の前で、扉がゆっくりと開かれる。

開いた扉から、ちりと聞こえた鈴の音。それは彼女の存在を表す音だった。

二人は頭を下げた。二人の君主が、ゆっくりとした足取りで部屋を出る。

顔を上げた夏苗は、目の前に立つ少女の姿を視界に入れ、胸をどきりとさせた。美しい皇女の和を具現化した正装は、まるで日本の神話から降り立った女神のように神々しい。現代は無き現人神の子孫としては十分な存在感を構築している。

その細い端正な顔立ちを見れば、まだ少女と呼べる幼さがあるのだが、それさえも神格化してしまう程の美しさが彼女を調和していた。

やはり自分とはまったく違う。彼女は別世界に生きる存在なのだ。それは届かない、高い世界。

「どうですか、中尉。一応既に確認はして頂いたんですけど、どこか変な所などありませんか……？」

陽和の言葉にハッと我に返る夏苗。取り繕うように切り替え、口を開く。

「いえ、相変わらずの御美しさを更に極められておられます。

殿下」

「八雲中尉の言う通りです。よくお似合いですよ、殿下」

「ありがとうございます、お二人とも」

「殿下の御美しい姿を目の前にすれば、さぞや将兵たちもお喜びになることでしょう」

「もう……ッ、言い過ぎですよ大尉」

照れ臭そうに微笑む陽和と、優しく微笑みかける佐山。客観的に観ても、二人が親しい間柄であることは明白な光景だった。

「……………」  
それを見て、ちよつと妬いてしまう自分がいることを、夏苗は理解していた。

「中尉」

「！」

呼びかけた夏苗に対し、優しい微笑を浮かべる。夏苗は表情を引き締め、「は」と短く応対した。

「また、見守っていてください」

女神のような いや、天使のような微笑みで、陽和は言った。

夏苗はそんな君主の命を、親友としてのお願いを、当然のように受け止めた。

「行つてらっしゃいませ、殿下」

外では、集まった大勢の将兵たちが彼女を待っている。佐山に連れられそこへ向かう彼女を、夏苗は頭を下げて見送った。

大湊基地へ訪れた伏見宮陽和皇女殿下は、大湊基地所属の将兵たちの前で演説し、北方軍事境界線を警備する彼らを、演習に参加する彼らを、帝国の最前線に立つ全ての将兵たちを激励した。古来より皇族軍人の家系として海軍に籍を置く伏見宮の皇女の存在は、最前線を任地とした将兵たちにとってはこれ以上とない励ましとなった。

夏苗は、将兵たちを激励し公務に励む陽和をずっと見守り続けた。確かに遥か高みの届かない世界に彼女は生きている。だが、それでも彼女を守るのが自身の使命であり、意志だ。本当なら泥沼の底で這いずりまわっていたはずの自分がここにいられるのは、彼女のおかげなのだから。

春の陽気に照らされる革命大通広場は、札幌の象徴であると同時に市民の間で人気の広場でもあった。特に休日には子供連れの家族がピクニックに訪れる姿も見られる。左右から無機質なビル群に囲まれた大通広場は、緑が生い茂る広い公園のようでもあった。

「コウ、ちよつと来てみて」

こうして夏苗姉さんと二人で遊びに来ることも珍しくなかった。屋台で焼きトウモロコシを買った俺と夏苗姉さんは、道の隅にあったベンチへ腰かけた。

焼きトウモロコシを食べていた俺たちのそばへ、広場の鳩が寄ってくる。その数はすぐに増えていった。

「あげてみようか」

そう言っつて、夏苗姉さんは自分の焼きトウモロコシの欠片をぱらぱらと鳩たちの前に落とす。鳩たちは群がるようにして集まり、夏苗姉さんからの頂き物を夢中になって食べ始める。

「コウもあげてみたら？」

夏苗姉さんが買ってくれたものを野生の鳥たちにあげると思うとあまり良い気分にはならなかったが、夏苗姉さんの優しい笑顔に負け、俺は結局目の前の卑しい鳩たちに自分の分を少し恵んでやっってしまうのだ。

「本当、自由で良いよなお前ら……」

群がる鳩たちを見て、俺は何気ない一言を呟いた。

その時、隣で夏苗姉さんが複雑そうな表情を浮かべたことを、俺はふと気付いてしまった。

何故、夏苗姉さんはあんな表情を浮かべたのか。その時の俺にはまだわかっていなかった。

夏苗姉さんの　　蒼い瞳が悲しげに揺れた意味を、俺は知らなかった

暗い部屋のベッドで浩は目を覚ました。

また姉の夢　　南日本が絡むと、特に思い出す過去の記憶。

浩は隣で眠っている女を一瞥する。部隊では兵士たちの恐れる政治将校である彼女だが、夜のベッドの上では一人の女だった。

浩は自分と同じように一糸まとわぬ姿で眠っている沙希を起こさないようにベッドから離れた。

机の上には、ベッドに向かう前に彼女と飲んだ酒が入ったビンとグラスがそのまま置かれている。浩はグラスを手にとると、冷蔵庫から天然水を取り出し、グラスに注いで飲み下した。

喉の渴きを潤した浩は、床に無造作に投げ捨てられた自分たちの衣服を避け、家族の写真立てのそばにずっと置いてある辞表の封筒を取った。

新たな任務。それは過酷で、簡単で、そして浩にとっては今までで一番の嫌味だった。

「……………」  
失った家族の写真を見詰める。そこに写る目つきの悪い子供。そのそばで優しく微笑む、蒼い瞳の少女。

浩は写真を抜き取ると、辞表の封筒と一緒にライターの火で炙った。それは火を前にすれば、どちらともただの紙だった。

オレンジ色の炎に浸食され、黒く染まりながらじわじわと消えていく昔の自分と家族を、ただ見詰めるだけだった。

燃えていく辞表  
まれ、そして消えた。

燃える端から、南日本を表す文字が炎に吞

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6322z/>

---

南北の海峡 -The Split Fate-

2012年1月14日12時45分発行